

SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～

Vol.
118

2026. 3

東日本大震災・原子力災害から 15 年 あの日を思い出し、祈る



おもとあさみ
撮影:大元麻美さん

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

巻頭言

子ども食堂を始めました！

シナピス運営委員 にっ た よしこ 新田 良子



昨年2月から子ども食堂を始めました。和泉教会での名称は、「ウェルカム食堂」です。

この「食堂」を始める前に、和泉市社会福祉協議会主催の居場所づくり講座を受講しました。

そこで、教会近くの中学校の校長先生が「子ども食堂をやってほしい」と思っておられることを知りました。

早速、校長先生に会いに行き、子ども食堂をやりたいと思っていることを伝えました。すると、テスト期間に給食がないのと、長期休暇の時に昼ごはんを食べられない子どもがいるので、その時にやってほしいというご要望でした。

手伝ってくださる方と相談して、メニューを決め、中学校から要望のあったテスト期間中に開催することを決めました。ところが、その時から、テストのやり方が変更になり、給食が実施されることになったのです。その情報を信者さんから聞いて校長先生に相談しました。

その結果、開催日を変更しましたが、子どもたちはなかなか来てくれなかったです。学校のメールシステムで、ウェルカム食堂のチラシを配布してもらったのですが、子どもたちには浸透しなかったようです。

学校も悪いと思われたようで、クラブ活動の生徒たちに声をかけてくださって、吹奏楽部の子どもたちが来てくれるようになりました。みんな美味しそうに食べてくれ、「おかわり」もしてくれるので、やりがいも生まれてきました。

しかし、夏休みになると、校長先生の思いとは裏腹に、子どもたちはなかなか来てくれません。本当に必要としている子どもたちに情報が届いていないのか、「食べに来るのにハードルが高いのか？」と、困り果てています。

まわりの方からは、継続することが大事なので、「諦めないでね」と言ってもらっていますが、なかなか厳しい状況が続いています。

今までは非定期の開催だったのですが、2026年度は、定期的を開催することを考えています。

良いアイデアがあれば教えてください！

中南米からの声① ニカラグア

おおもり ゆうじ
事務局 大森 雄二

メキシコから南米大陸に向けて斜めに続く中央アメリカにニカラグアは位置します。中米では一番面積の広い大国です。豊かな自然に恵まれている一方で、ハリケーンや火山の噴火、地震などの自然災害が多い国です。

「詩人でないニカラグア人はいない」と言われるほど、詩が盛んな国で、歴史的な節目はもちろん、日常の暮らしの中でも、詩が特別な地位を占めている珍しい国です。

今回は、ニカラグアの友人から歴史を紹介してもらいました。侵略者とその手先によって翻弄され続けた人びとが、今は、かつて夢を託した大統領によって厳しい状況に置かれています。

そんな現実の中、人びとが求める幸福への道と教会の果たす役割を、これから関心をもって応援したいと思います。

《 抵抗と矛盾の歴史 》



ニカラグアは、コロンブスが第4回航海でカリブ海沿岸に到達したことによって、ヨーロッパに知られるようになりました。

それ以来、この小さな中米の国は、重要な地政学的な位置、激しい内紛、そして正義と自由を求める人々の闘いによって特徴づけられてきました。

植民地時代には、先住民を守ろうとしたアントニオ・バルデイベイエソ司教が、権力者の利害に逆らったために殉教し、不正に沈黙しない教会と良心の象徴になりました。

ニカラグアは、ニカラグア湖とカリブ海へとつながる川のおかげで、大西洋と太平洋を結ぶ自然のルートとなり、19世紀のゴールドラッシュ時代には多くの人びとが通過する道として利用されました。

1856年には、政治的な不安定さと外国の野心が重なり、米国人フィリバスター(非合法的な軍事行為を行う者)の一団が策略によって政権を握り、その指導者は大統領を名乗るに至りました。

その後20世紀に入ると、米軍の駐留に対してオーガスト・セサル・サンディーノがゲリラ闘争を率い、主権回復を訴えましたが、彼は裏切りにより暗殺され、その後ソモサー族による長期独裁が始まりました。

ソモサ体制は、広範な反独裁運動によって1979年に崩壊し、革命政権が誕生しましたが、その後ニカラグアは冷戦の最前線となり、内戦と外部勢力の干渉に苦しむことになりました。

ソ連崩壊後は一定の民主化と経済回復が進んだものの、かつての指導部は再び選挙で権力を握り、徐々に権威主義的な体制へと傾いていきました。

現在のニカラグアでは、強い統制と弾圧が続いています。その中で、ニカラグアの世論から最も信頼される組織であるカトリック教会は、迫害や制限を受けながらも沈黙の祈りと秘かな奉仕を通して、最も弱い人々に寄り添い続けています。

シナピス 移動学習会

「基本的なことを知りたい」報告

実施日時：2026年2月1日（日）午後2時～3時30分

実施場所：カトリック泉佐野教会 聖堂

講師：ビスカルド篤子さん

参加者：41人（浜寺1、和泉2、岸和田4、熊取3、貝塚1、泉南8、泉佐野12、岬4、紀の川3、マリア布教修道女会1、大阪梅田2）

主催：岸和田地区宣教評議会社会活動委員会

共催：カトリック大阪高松大司教区社会活動センター・シナピス

主な内容：

基本的なことを知りたい！

～難民とは？ 在留資格とは？ なぜ大阪高松教区でやってるの？～

- ① カトリック大阪高松大司教区の社会に向けた歩み
- ② シナピスは、平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援しています
- ③ 世界の難民 2024年5月現在で約1億2千万人
- ④ 日本に保護を求める人々
- ⑤ 難民認定数の各国比較(2023年)
- ⑥ 2022年8月、アフガン難民が133人認定された背景
- ⑦ 日本の難民認定者数の推移(国籍別)など
- ⑧ JASA(日本アフガニスタン支援の会)発足の経緯
- ⑨ まずは事実を見て見よう！「外国人優遇」デマあれこれ

〇●〇参加者アンケート〇●〇（回答29人より）

① 学習会に参加してどのように感じましたか。

とても良かった17人、よかった4人、無記入8人

② 特に心に響いたこと、気が付いたことは。(自由記載)

- ・難民が日本を豊かにする、ということばの意味が今日のお話を通してよく理解できました。
- ・絶望の世界の中で希望を見いだして歩もう、という教皇フランシスコのことば。
- ・難民が沢山いることを初めて知った。
- ・シナピスの活動が難民のために努力しておられるのがよく分かりました。
- ・同じ地球に生きるひとりひとりの大切な命が様々な形で阻害されているが、全く手をさしのべられていない現実を知ることができた。

③ ご感想をお聞かせください。(自由記載)

- ・今わたしたちの周りでは、何の主義・主張のない、普通の人々までもが、外国人排他のようなことを、日常会話の中で話しているのがとても怖いです。
- ・シナピスが行っている、困っている人を助ける活動について、具体的に知ることができて良かったです。
- ・何か難民に対して支援することができるように努力したいと思います。



阪神地区 シナピス移動学習会

主催：阪神地区社会活動委員会

日時：2月8日(日) 14:00～15:30 会場：夙川教会 ブスケホール

講師：内坂 晃^{うちさか あきら}牧師(日本基督教団)

テーマ：「バビロン捕囚が意味するもの」

世界の各地での悲惨な争いで多くのいのちが奪われている今、

「宗教を持っている人どうしがなぜ争っているのか」という疑問に対して

聖書はどう語っているのかを知り、今後の歩みの助けにしたいという思いで企画しました。

参加人数：47名



《バビロン捕囚が意味するもの》

3回にわたる「バビロン捕囚」は、ユダヤ教の確立に大きな影響を与えました。捕囚前は、エルサレムの神殿が宗教生活の中心でしたが、これまでの「神殿信仰」ではなく、「人びとの生き方」を信仰の中心としました。「自分たちが偶像礼拝をして主に背いたためにこうなったのだ」と考え、神の前に「悔い改め」がなく「罪への裁き」がない状態…つまり、「罪のゆるし」だけでは「福音」にはならないという考え方になりました。律法を重んじ、祈りと礼拝を大切に、ユダヤ教を確立しました。捕囚という民族的悲劇が無ければ、ユダヤ教もキリスト教もなかったことを知りました。

《現代の日本に置き換えて考える……反省・悔い改め》は？》

戦争中は、「神社参拝は、愛国心と忠誠心の表現である」と勧められ、誰もが「戦勝祈願」のために神社に詣でたそうです。しかし、戦後は「敗戦国の神」(神社)はさびれ、「戦勝国の神」(キリスト教会)は“繁栄”し、「キリスト教ブーム」と呼ばれる現象もあり、「神の前に悔い改めていない」と指摘した学者も多かったことを知りました。80年前、焼け野原となった日本で、歴史を振り返り反省をし、批判的な発言した人は牢獄に入れられました。

「新しい戦前」とも言われる現在ですが、果たして、日本はどこまで反省をしたのでしょうか？

《今、必要とされているものは、「宗教改革」》



「罪への裁きの無い“福音”は、本当の意味での“良き知らせ”ではない。神のみ心を行なう者だけが天の国に入れるのだ」という講師のお言葉が心に響き、聖書のことばと共に、残っています。

わたしに向かって「主よ、主よ」という者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行なう者だけが入るのである。(マタイ7・21)

「バビロン捕囚」が、旧約聖書に出てくる“歴史上のできごと”としては漠然と知っていたつもりでしたが、捕囚された人たちの苦しみ・悲しみが深い信仰へつながり、現代に生きていることを知り、この講演会のテーマ「バビロン捕囚の意味するもの」という意味が良く分かりました。犯した罪に対し、真摯に向き合い、深い回心をしてこそ、信仰に生きる者の姿であることを学びました。

そして、信仰に生きようとする私たちは、「残虐な行為にいたる争いは厳に慎むべきであり、見て見ぬふりをしてはならない、そして平和を築くために生きる」ことを改めて決意する学習会となりました。



情報保障ガイドライン作成に向けて①

教区障がい者委員会

大阪高松教区の障がい者委員会では、「障がい者への合理的配慮・情報保障」に関する記事を不定期で連載しています。障がいを持つ人が、教会の礼拝や活動において、無理解、参加しにくい環境など、様々な「壁」「障害」に直面することは少なくありませんので、より一層の理解・取り組み・改善が求められています。シナピスニュース紙上や具体的な場面でも、関連情報などを提供し、皆さまのお役に立てることを願っています。

日本は国連「障害者の権利条約」に批准し、2016年に「障害者差別解消法」が施行されました。これに伴い、シナピスニュースでも合理的配慮や情報保障について度々取り上げてきました。2024年には「障害者差別解消法」が改正・施行され、公的機関だけでなく民間事業者にも合理的配慮の義務が課されることとなりました。宗教法人であるカトリック教会も対象となります。法律的な義務という理由以上に、教会共同体が障害を持つ人とともに考え、参加しやすい場を作ることは、共同体にとっても「シノダリティ」の精神をはぐくむ大切な機会となるでしょう。2025年度からは特に教区としてのガイドラインやマニュアルの作成を目指していますので、一般的なケースとは異なる教会特有の場面に焦点をあて、情報保障の具体例や改善案を取り上げていきます。(公的機関や一般的なケースについては、千葉県ガイドラインを参考にされることをおすすめします。)

○2025年にシナピスニュースに掲載された関連記事は以下の通りです。

合理的配慮(2025年教区時報1月号大司教メッセージ参照)

合理的配慮の義務化(2025年10月)

情報保障(2025年3月)

情報アクセシビリティ(2025年8月、9月、11月)

難聴と情報保障(2025年4月)

視覚障害と情報保障(2025年8月)

発達症(発達障害)と情報保障(2025年12月)

○聴覚障害と情報保障については、難聴・ろう・中途失聴など、それぞれの特性に応じた記事を今後準備していく予定です。

「聞こえない」ってどういうこと？



教区聴覚障がい者ボランティア会 いそべかずこ 磯部和子

聞こえない人に対するガイドラインを作るにあたって、「聞こえない」ってどういうことかをまず、学習しましょう。みなさん、聞こえない状態をイメージしてみてください。

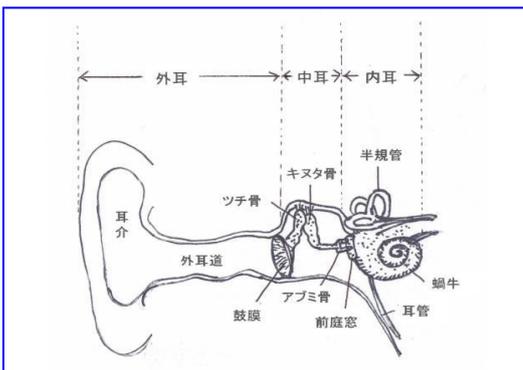
- ・いろいろな音が聞こえないから不便だろうな。
- ・お喋りの輪に入れないから寂しいだろうな。…と、今、私たちが聞こえなくなった状況を想像します。

でも、「ろう者」と言われる人には、どれに音があるのか、ないのかもわかりません。聞こえない(聞こえにくい)人はまとめて「聴覚障害者」と言われますが、一人ひとり、その聞こえ方も、コミュニケーションの方法も違います。補聴器で聴力を補える「難聴者」については、シナピスだより 2025 年の 4 号に掲載していますので、今回は「ろう者」を中心に、お話ししていきたいと思えます。では、一人ひとり違いがあるのはなぜでしょう。

- ① 失聴時期によって 言語獲得(大体 3 歳位)以前か、以後か。わたしたちが、ことばを最初に覚えたのも、話ができるようになったのも、赤ちゃんの時に、耳で繰り返し、聞いたからです。聞こえないから話せないのです。また、生まれた時から聞こえない子どもは「音」があるということも知りません。
- ② 残存聴力によって デシベル 聞こえの程度(d b)で、身体障害者手帳の等級が決まりますが、聴力検査はあくまでも、「音」が聞こえるということ。「ことば」として判別できるわけではありません。音に反応を示すと「聞こえている」と誤解されることがありますが、何を話しているかはわかりません。
- ③ 障害部位によって
耳は入り口から鼓膜迄を外耳、耳小骨のあるところを中耳と言い、ここまでに障害がある場合は 補聴器で補うことができます。その奥、蝸牛から脳までを内耳と言い、今回お話しする「ろう者」はこの障害です。

「ろう者」は、ろう学校で手話を習ったり、手話で勉強していると思っていますよね。ところが大正時代から平成まで、ろう学校で手話は禁止でした。日本のろう教育は「口話主義」と言われ、口の動きを読み取ったり、声を出す訓練に力を入れていました。口の動きで会話のできる「ろう者」もいます。はっきり口を開けて、普通で話してください。同じ口形の言葉も多いので、ちょっとした身振りをつけていただくとうわりやすいです。

文部省(当時)の通達で、日本中の聾学校(ただ一校、大阪市立聾学校を除いて)から手話が消えたのに、「ろう者」の母語である「手話」は寄宿舎の中で、町の中でひっそり、しっかり生き続けました。今や「手話は言語に含まれる。」と、「改正障害者基本法」にも明記され、「手話」は言語と認められるようになりました。声が聞こえない人にとって、表情のある手話は、こころの伝わる手段です。機会があったら、簡単な挨拶だけでも覚えてみませんか。





「イランは勝ちます」

～イラン人たちイランを語る～



1月上旬、イランで大規模なデモが起き、死者も出ているという報道が数日続きました。が、それからピタッと報道が止まり、情勢が見えなくなりました。

シナピスは、難民申請中の多くのイラン人と関わっています。

1月21日の午後、彼らが今、抱えている思いを聴く集まりを持ちました。事務局員だけでなく、入管訪問の現場で関わってきた人、関心を寄せるマスコミ関係者にも声をかけ、彼らの母語であるペルシャ語のプロの通訳の方に入ってください、彼らの生の声を聴くことができました。

以下、その一部を皆さんにお届けいたします。

(Pさん) イスラム革命の初期、15歳で出国した。当時、余裕のある人は、将来のないことに気づいて、自由な世界を目指して国を出た。食べるため、自由のために行動しただけで、贅沢のためではないが、結果として、不安定な生活・人生になってしまった。

日本に来たのは35年前、大学2年だった。言葉、文化、なじんだ食事、友だち、家族、親戚をなくして、精神的にやられている。

デモが始まってからこの間、家族の消息は全くわからない。今はスターリンクやYouTubeで大体の情報を聞くだけ。5千人～2万人が犠牲になっている。ウクライナよりは少ない数だが、数日間でどうやってこんな数の人が殺されたのか、わからない。アフガンやシリアのグループにマシンガンを渡して殺人をさせているとも聞く。なぜ、このような政府が倒れないのか理解できない。

警察がデモを守り、平和的に総理が変わる日本との違いは何だろう。警察や軍人が支配する政府は、命令には「はいわかりました」以外の答がない。なぜ殺さなければならないか、すべては宗教を理由にする。どうして同じ民族を殺す許可を出すのか。

今のイランで、若い人は持っている力を発揮できない。刑務所でひどい虐待や拷問が行われていることはみんな知っている。私だったら銃と戦う根性はない。

天然ガスや石油を中国には輸出するのに、国内には足りない。そのお金はどこに？ わからない現実がある。革命後、ガソリン値上げ、マフ

サ・アミニの死（ヒジャブの着け方を理由に拘束され3日後に死亡）への抗議で大きな反対の声があがったが、国の中で止められてしまった。独裁者がいる限り何も変わらない。

(Sさん) 6年程前に来た。残してきた家族とは、20日間連絡が取れていない。停電が多くて、国内から声を発せない。今回のデモはドル高による生活苦が理由。今、イランで暮らす人の苦しみ、声を代わりに届ける力になって欲しい。47年間続くイスラム共和国政府は悪しき政府。若者は国外へ出るしかない。逃げ出すことを誰もが考えている。

(Vさん) イデオロギーのみが大切にされて、生命、安全が脅かされている。多くの若者が生命の危機にある。若者は何を求めているか？「ごくフツウの生活」。命以外に何も失うものがない若者が、より良い未来だけ求めて、命をかけて街に出ている。

(Hさん) 2005年イスラム共和国に恐怖を感じて出国してから日本にいる。入管は「帰りなさい」と言うだけで、「難民であること」に耳を傾けない。社会の片隅にポツンと置き去りにされ、存在を認めない社会のせいで、孤独を感じている。仮放免の状態、2か月に1回入管に出頭して、まじめに暮らしている。理解してもらえない、何も信じてもらえない状況で、これまで暮らしてきた。自分たちは終わった世代で、未来がないと感じているが、若い世代には未来がある。助けてほしい。理解してほしい。

パフラヴィー王朝が倒されて、結果的にテロリストと言えるイスラム政権ができた。革命初期、水道代は無料だったが、イラクとの戦争が始まると有料になった。イスラム教の指導者は、庶民の暮らしに関心はない。テロリストが運営する国では、右を見ても左を見ても叩かれる。当たり前だけど、みんなが金持ちにはなれない。イスラム政府は体をなしていない。宗教は尊重すべきであるが、イスラム教はウィルスだ。政府は、イスラム教から見た不信心者には、何をしても構わないと思っている。今の政府を倒せるのはアメリカだけ。1日も早く攻撃してほしい。

支払うべき代償を支払っても、イスラム政府を取り除く結果を望みます。

(Mさん) 家族の消息がわからず、ストレスを感じている。

王の時代(1979年以前)の国旗にはライオンと太陽が描かれていた。今はアッラーをかたどった文字がアラビア語で書かれていて、とても悲しい。47年前のクーデターは、米英仏の思惑でパフラヴィー王が泥棒とされた。イスラム政権では、マイナス成長、政治犯の弾圧、若者の命の軽視、コロナの感染爆発(科学より宗教的な価値観を優先させた結果と言われる)など、ひどいことばかり。人びとはなぜ通りに出るのか、自由を求めているから。

武器を持たずに通りに出た民衆が、外国の支持もなく、宗教政権がなくなることを訴えている。

マフサ・アミニの死に抗議するデモは結果へとつながらなかったが、リーダーになる人物がいる。今回は成功させたい。

レザー・シャー(パフラヴィー朝最後の皇太子、アメリカに亡命中)で私たちはまとまることで

きる。これまでのデモはそれぞれの主張がバラバラだったが、今回はまとまって王政を求めている。とにかく政権を打倒してほしい。

この危機は過渡期で、ここを過ぎてから、改めて国の体制を問う時が来る。そうすれば、テロリストの国ではない、安定した道を進める。シャーには政治力も、外交力もある。

私たちは「誰も通ったことのない道を通って行くしかない(ガンジーの言葉)」

イスラム政府は、武器を持たない市民を、5千人と言われる外国部隊を雇って殺させている。

パフラヴィー朝の民衆国家の実現を求める声を、日本政府を含めて聞いてほしい。在日イラン大使館は一度、閉鎖してほしい。今の政府とは断交してほしい。

デモや集会など大きな運動をすべき時だ。トロントでは11万人が、日比谷では3千人が、シャーからの呼びかけにこたえて声を上げた。大阪でもやりたい。シナピスの持つノウハウを借りたい。外国にいる私たちがイラン国内のイラン人を勇気づけたい。

アメリカの介入は、もちろん最善の選択肢ではない。しかし私たちには甲や乙の選択肢はなく、丙や丁しか残っていない。良くはないが、他に選択肢がないことを理解してほしい。

立ち上がった若者はテロリストと呼ばれている。私たちは武器さえあれば良い。

今は、パフラヴィー+アメリカのカードを使うしかない。



アメリカの介入を望むしかないところまで、彼らが追い込まれていることには、ショックを受けました。一方で、国内に残るイラン人の声も気になります。デモに続く騒乱は、アメリカとイスラエルの企てという指摘もあります。「両国が再び武力行使を準備」との報道がありました。「生まれ育った土地でただ普通に暮らしたい」という人びとの思いが、これ以上踏みこじられないことを願います。(事務局 おおもりゆうじ 大森雄二)

静かなジェノサイド — へりくだり、死に至るまで、従順なガザ

シナピス運営委員 にしぐち 西口 のぶゆき 信幸



わたしのためにののしられ、迫害され、
身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、
あなたがたは幸いである。
喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。
マタイ福音書 5:11-12

四旬節が間近になったこの時期、ガザからの声はますます小さくなってきました。聖地に生まれたただけ、身に覚えのない罪のために迫害され、忘れ去られたガザ、今こそ、この小さな声を聴き分け、その痛みを分かち合うことの大切さを痛感します。

停戦「第2段階」は、ガザ滅亡「第2段階」

イスラエルは組織的、継続的にガザを狭め、孤立させ、生きる力を奪い続けています。そして平和評議会は、破壊の犯人であるイスラエル・アメリカに補償を求めず、世界からお金を集め、非人間化した都市に人々を誘い込もうとしています。2月19日に開かれる平和評議会はイスラエルの「停戦」違反を咎めることなく、砂漠となったガザの開発計画について話し合わせ、ガザの無害化への協力を誓う場になります。これはガザの民族浄化です。

「イエスが住んだ地を、悪魔が支配しようとしている」

エルサレムの総主教ピツァバラ枢機卿は、二ヶ月ぶりに訪れたガザの破壊と殺戮、放置されている様を見て、米国の「平和評議会」はガザに対する「植民地主義的作戦」と非難、カトリック教会はトランプのガザ「平和評議会」に参加すべきではないと述べています。



停戦「第2段階」 — 封鎖と締め付けの強まる「ハマスのガザ」

10月10日の「停戦」から2月9日まで、ほぼ毎日イスラエル軍はガザを攻撃し、581人を殺害、100人が子どもでした。イスラエルは、UNRWAに加えてガザの食料と病院を支えてきた37の人道団体の活動を1月上旬に禁止しました。3月には飢餓と医療の停止による死者が増大し、10月までに10万人の幼児と4万人の妊婦・授乳婦が重度の栄養失調となると予想されています。

☆イエローライン — 銃で追い立て、水も入れぬ強制収容所「ハマスのガザ」

ガザを分割するイエローライン付近に住む住民は「戦闘区域」に入ったかどうかを知ることができず、ブロックの周辺だけで167人が殺害されています。イエローブロックを領域内にじりじりと移動し、さらに西への移動を人びとに迫っています。半分にされたガザで住める場所は、さらに3分の1にまで狭まっています。

日課となった無差別銃撃

イスラエルの女性兵士が、ガザ北部のテントに向かって発砲する自分の動画を投稿（この日、300m先ではテント暮らしの6人が明け方殺害されました。）



☆「ラファ解放」は象徴的なもの ―― 針も漏らさぬ「天下の陰」

悲願であったラファ検問所は2月2日より再開されました。約50～100人という想定にもかかわらず、再開初日にラファを通れたのは5人の患者の出国だけ、数十人がイスラエルの治安検査で遅延や阻止され、救急車は国境で何時間も待機させられました。

壊滅状態の医療システムによって緊急治療を待つ18,500人の患者はすでに900人が医療を受けることなく亡くなっています。50人だけの出国許可のペースでは全員の避難は絶望的です。

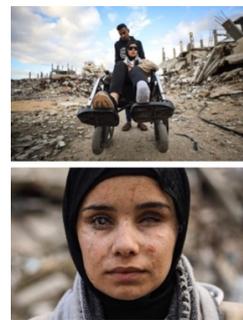
入国する人はもっと厳しい制限を受けます。戦争中にガザを離れた人のみ、50人以下と厳しく限定されています。ガザに帰還する人は、衣類と1つのバッグのみ、現金600ドル、液体、タバコは持ち込み禁止、携帯は1台のみ、などイスラエルによって異常な制限が課せられています。目隠しや身体検査、拘束、屈辱的な尋問、反ハマス民兵による脅迫、所持品の没収、盗難、さらには患者、高齢者、女性を含む逮捕が行われています。

☆社会的な弱者は今、どうしているのでしょうか？

支援が必要な人ほど支援が届きにくい。平和評議会が提案している「ガザ第1コミュニティ」では自立できる人しか入れないと書かれています。弱者切り捨てなのです。瓦礫の中のテント生活が2年も続き、「ガザ」内にはまったく復興の手が差し伸べられていません。唯一の希望であったラファも壊滅的な「ガザ」を救うものではありません。「ガザ」を出て治療や支援を得たい、復興住宅で少しでも家族の負担を減らしたいと思っている人が多くいます。彼らは声を出せません。そんな中で、二人の声を拾うことができました。

ラファ検問所が開くのを待ちながら、もう片方の目の治療を受けようとしている少女がいます。

2026年1月19日、ガザ市のジャバリアにある自宅への攻撃で片足と片目を失った17歳の少女ファラー・アル＝カフルード、両親を失い、片方の目を完全に失った。激しい身体の痛みと、深いトラウマの両方と闘いながら、不十分な医療体制と人道状況の下で生き延びるために必死にもがいています。



サラは特別なニーズを持つ子どもです。

彼女は車いすを持っておらず、移動するために地面を這うことを強いられています。重度の聴覚と視覚の障害に苦しんでおり、日常の苦痛を和らげるため、車いす、医療とリハビリが急務です。ガザの外で治療することもできず、新都市にも入る資格がありません。



アメリカ国民の税金でイスラエル軍がビルを破壊し、その修理費用を世界の投資家から集め、トランプが自分の商売にするという、前代未聞の殺人強盗ドラマの結末です。ここに権力者が「戦争を好む」理由があります。また、パレスチナの国家承認を望みながらも、イスラエルに武器を提供し、購入する理由があります。株式市場は潤います。メディアも口を閉ざします。しかしながら、社会的弱者が一番、被害を受けることとなります。これが政治であるならば、私たちキリスト者も逃げることはできません。「怒りの罪」は社会の罪を成長させます。知らないうちに私たち自身が平和を崩していることを、ガザの出来事は教えてくれています。ガザの人たちの声を聴いてください。一緒に断食と祈りを捧げましょう。

メディアは「抑圧された者」の側に立つ



おおもと あさみ
大元 麻美 フリーライター

差別問題や人権に関する記事を書かせたら右に出る者がいないという意味で、人権派の人々はよく「西の中村。東の石橋」と二人の名前を挙げる。

西日本を代表するのは元毎日新聞の記者で、現在フリージャーナリストとして活躍する中村 一成(なかむら いるそん)さん。東日本は神奈川新聞の記者、石橋 学(いしばし がく)さんである。

今年1月22日、「外国人住民基本法」の制定を求める全国キリスト者集会(外キ協)の第40回全国協議会が東京・新宿区の日本福音ルーテル東京教会で開催された。

特別講演の講師として登壇した石橋記者は、日本の朝鮮植民地支配によって渡日した、あるいは連れて来られた朝鮮半島にルーツがある人々「在日コリアン」へのヘイトスピーチ(差別扇動表現)など、あらゆる差別問題について長年、取材を続けている。

石橋記者の“すごいところ”は、これまでの記者が躊躇してきたレイシスト(人種差別主義者)の「実名報道」に踏み切ったことだ。購読者がレイシストの言動に惑わされないように、実名でこの人の発言には気を付けるようにと注意を促すためだ。

そして“もう一つのすごさ”は、石橋記者の取材方法にある。石橋記者は、ヘイトスピーチのデモ(以下・ヘイトデモ)の現場に必ず現れて、レイシストたちに「公開取材」を行う。ヘイトデモとは、レイシストたちが、駅前などの公共の場を使って外国人への差別をあおる発言を繰り返す行動のことだ。

ヘイトデモの真ただ中に、石橋記者はレイシストの正面に出ていき、そして彼らに質問を浴びせるのだ。そうすれば、レイシストは逃げるわけにもいかず、観衆が見つめる中で質問に答えざるを得ない。その間、彼らは差別発言ができなくなる。そうやって石橋記者は、当事者が命の

危険を感じるヘイトスピーチを少しの間でも聞かなくてすむように、また当事者の心が傷つかないようにと、この「公開取材」という独自の取材方法を編み出したのだ。

外キ協の特別講演では、石橋記者は川崎市で2020年7月に全面施行された罰則付き「川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例」について言及した。

この川崎市の条例は差別言動に対して全国で初めて刑事罰を設けた画期的な差別根絶条例だ。この条例ができる以前は、レイシストは警察の許可をもらって堂々とヘイトデモを実行。当時は、デモに関しての規制は道路交通法しかなかったため、警察官は、レイシストが安全に速やかに道路を行進できるようにと、彼らの警護にあたっていた。そのため、市民らがヘイトデモを中止させようと道路をふさぐと、警察が道路交通法違反だと、逆に市民らに厳しく注意をするというおかしい現象”が起きていた。

その光景を見た当事者は、警察さえも自分たちのことを守ってくれないのだと、二重三重に傷ついたという。しかし条例制定後は、ヘイトデモの光景に変化が現れ、警察官は“差別を煽動”するレイシストではなく、“受け身”の状態を強いられている当事者を守るようになったという。

こうした現状を地元メディアが報じ、市民が声を上げて、全国初の罰則付き差別根絶条例が誕生したのだ。そしてさらに、この条例を運用しながら、今もこの「川崎の宝である条例」に命を吹き込もうと闘い続けている。

政治家たちがヘイトスピーチを公共の電波を使って堂々と発信できる理由は、日本には差別を包括的に禁止する法律がないからだ。政府を挙げての排外主義ムードが高まっている今だからこそ、市民とメディアの協力のもと、包括的な差別禁止法の制定が求められる。

ちょっとほっこいおじゃま 笑うページにゃ福来たる?!



ことばを紡ぐ～言葉で遊ぶ フレイルって何？

ペンネーム 「旅する象」

ツムラという会社をご存知だろうか。漢方薬製造の最大手、日用品としては入浴剤のバスクリンが有名だ。この度「50 才からのフレイル川柳」を募集した。グランプリはなんと賞金 50 万円だ。

そもそもフレイルとは何か？ ツムラのサイトを見ると「歳とともに体力、気力が低下した状態のこと」を言うらしい。

筋力が低下して転びやすくなったり、一人で過ごす状態が続いて、物忘れや気分の落ち込み等、心身に変化が起こるといふ。ただこれらの症状は日常生活を見直す等の適切な対策を取ることで進行に歯止めを掛けたり、健康な状態に復帰することが可能らしい。対策のポイントはバランスの良い栄養、適度な運動の継続、人との繋がりを持つ社会参加だそう。皆さんは大丈夫ですか？

では、入賞作品を紹介していこう。

まずは、【フレイルの入り口かも】部門から。

今回の審査員には大阪の誇る兄弟漫才師、中川家も参加している。

【展覧会作品よりも椅子探す】

人が多いと疲れますもんねえ。後ろ頭しか見えへん。

【駐車場私の愛車返事して】

イオンとか、だだっ広いところだと、どこに駐車したか分からなくなることありますよね。

心配な時、私は近くの区分位置を示すボードの写真を撮っておきます。

これで停めた位置が判りますよ。A 地区 5 とか書いてあるやつです。



次は、【フレイルの対策始めました】部門です。

【キッチンで煮炊き見ながらかかと上げ】

【仕事で逢うフロアのトイレ行く】

隙を見つけては体を動かすことが大切とか。一駅手前で降りて歩くのもありですね。

続いて、【氣遣い】部門。周りの人でフレイルかもと心配になる人はいませんか？

【3冊目母に送った御朱印帳】 趣味を見つけて活動的になるのはよいことですね。

【スマートフォン母と一緒に勉強中】 携帯ショッップのスマホ講習会に親子で

参加してみるとか。話しながら歩けば、脳の刺激にもなりますよ。

最後に私も一句。

【ルンバでも越える段差に蹴つまずく】

【その話三度目なのは知らぬふり】

さて、バスクリンたっぷり入れた熱い風呂に入って、

脱衣場で踵あげしよっと。



2月0日

寒さが底をついた2月の第1週、数年ぶりに坂田さん(仮名)が現われました。かつては毎年のようにインターナショナルデイにも参加していた彼は、いつもペルーの人たちと楽しそうに過ごしていましたが、その日、シナピスの戸口に立つ彼は別人のようでした。

坂田さんは野宿をしていました。仕事にありつきたときのお金で食いつないでいましたが、その日の前夜、寝ている間に財布を盗られ現金や身分証など全てを失ってしまったそうです。私たちは取り急ぎ彼に温かいラーメンを提供し、落ち着いてから坂田さんと一緒に今後どうすればよいか考えました。

坂田さんはまず警察に紛失届を出し、次に入管へ行って在留カードの再発行をしてもらうと、再び教会に戻り、今度は私も坂田さんとともに区役所へ行きました。

福祉課では彼の経緯を記入しなければならないので、私は坂田さんに聞き取りをし、日本語で代筆しました。「おじいさん福島の人。ペルーへ行った。私は日系3世。中学出でずっと働いた。30年前に日本来た。愛知、京都、よく働いた。結婚して子どももいた。最後、尼崎の工場でリストラ。あとムズカシ。」無職と非正規労働の繰り返し、離婚やアルコールなど、数え切れない辛さや哀しみを味わったのでしよう。

役所の方は、大阪市のケアセンターと医療保護施設への入所の道をつけてくれました。また、土日を挟んでしまうのを心配して、社会福祉協議会で食料等の援助を受けられるように紹介してくれました。

坂田さんに再会してから一週間。彼はこの間シナピスにある食料品を何度も持ち運んで、ともに寒さを凌いでいる公園の仲間たちと分かちあっていました。

週明け月曜日、坂田さんはケアセンターへ行くため、自分の足で区役所に向かってゆきました。



私の変な特性

皆さん、どうか誤解しないでください。実は私は誰かの話をするときには、その登場人物になり切らないと話ができないタチなんです。別にウケを狙っているわけはありませんのでよろしくご容赦を。

しかしこれ困ったもので、深刻な問題を必死に訴える時でも、私はどうも無意識に人の口調を真似て語るらしく、「深刻さが伝わらない」と言われたり、大事な会議の席でも「ふざけている」と笑われた経験は山ほどあります。モノマネのクオリティーは高いらしい。

またこの特性のせいで自分でも嫌になるのは、別に真似たくもないのに、方言の違う人と話している時に相手につられて自分の口調がその方言に移ってしまうところです。

先日、電話で関東の人と話していたときのこと。例によって、耳に入るイントネーションにつられて私のアクセントがつい関東寄りになってしまい、私は違和感を抱えながら喋っていました。

と、ある瞬間、その関東の人が「ほんで」と言うではありませんか。彼女は常に冷静沈着で、早口だが穏やかな口調が持ち味の、テレビのコメンテーターにでもなれそうな人です。その彼女がポロっと「ほんで」やて。そうか、誰でもつられて口調を真似てしまう時って、あるんですね。

その時の話題は「分断と排斥の進む社会で教会はどう歩むか」という真面目この上ない内容でしたが、「ほんで」を聞き逃さなかった私は、深刻な声で受け答えしながら口を開けて笑っていました。電話でよかった。ズーム会議にしないで、ああ、よかった。

乱丁・落丁のあるニュースレターを 受け取られた方へのお詫び



ニュースレターを受け取られた際に、天地逆に封入されていたり、ページが抜けていたりすることがあり、失礼をお詫びいたします。

実はシナピスでは印刷から発送までの作業工程の殆どを難民移住者の方がたにお願いしており、思わぬハプニングも散見されることがあります。スタッフは作業工程に注意を払いますが、日本語を読めない人、悩みを抱え、考え事をしながら作業する人など様々です。どうか笑って御見守り下さいませと幸いです。なおご一報いただけましたら、完成版を御送りしますのでご連絡くださいませ。 ☎06-6942-1784

★シナピス「のと」ボランティア

4月1日(水)～4月5日(日)

聖週間は「のと」へ!

能登半島地震で全壊し、

昨年9月に献堂された輪島教会へ

問合せ：シナピス ☎ 06-6942-1784



シナピスホーム (カフェ)

3月の予定

カフェ：7、14、21、28日

★土曜日の13時頃～16時頃

☎ 080-8940-8847

ランチ：★3月はお休み

「ニュースレター配布停止」、「点訳版の郵送」をご希望の方はシナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784

あとがき

投票日の前日、夜の梅田でのこと。

コーヒーを買ったコンビニで、南アジア系の男性店員が、女性の新人店員に流暢な日本語で接客を教えながら応対してくれた。私には同国人に見えた二人が、日本語でやり取りする姿に感動した。こんな外国人たちの頑張りにより日常は支えられている。

山本太郎さんの演説に出くわした。原発について発言して芸能界を干されてから、日本社会の「貧困」を学び、れいわ新選組の代表になるまで。誰の側に立つか、立場を鮮明にしたからこそ見えてきた、与野党のなれ合い政治の結果としての今と未来を、自分の言葉で熱く語っていた。

演説の場に、大きな袋を両手に抱えた男性が一人。「誰か俺のこと助けてくれないかな」とつぶやきながら、行ったり来たりしていた。寒い夜の寝床に困る男性の小さな声と、弱者を守ろうと訴える大音量。主権者としての投票だけでなく、人間として求められていることがあるなあと感じた。(ゆうじ)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約1000m

地下鉄中央線森ノ宮2番出口より 約800m

JR 玉造駅より 約1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造1番出口より約800m

●車でお越しの場合

阪神高速13号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

